カレッジ通信

編集・発行
東京建築カレッジ

授業見学
大歓迎！
TEL
03-
5950-1771

短かった2年間、何物にも代えがたい時間でした

素晴らしい仲間ができた！

第23期生 クラス運営委員長
佐藤 義和さんに聞きました

技能照査実技試験の終了後、制作物「化粧棒隅木」と一緒に（2020年1月19日）

3月28日、東京建築カレッジの全2年間の教育プログラムを修了し、第23期生22人が巣立っていきました。この期は、入学当初から一貫してクラスにまとまり感がありました。メリハリを利かせて授業に向かい、集中すべき時には一致団結する姿が印象的でした。個性的なリーダーが何人もいたことが良い効果を上げていましたが、その中でも、入学式の日にクラス運営委員長を引き受け、全体のまとめ役として最後まで自覚的に行動してきた佐藤義和さんの貢献には大きなものがありました。第23期生代表として佐藤さんに2年間のカレッジ生活を振り返ってもらいました。

◆2年間は長かったですか？短かったですか？

はっきり言って短かったですね。その分、充実していたのかなあと思います。座学、実技実習共に大変勉強になりました。

◆20年を超える大工歴、仕事の調整をつけての入学は相当な覚悟だったと思います。

経験以上のことを学ばせていただきありがたく思います。ときには経験や知識がじゃまをしますし、ゼロから学ぶ気持ちで入学しました。一週間分の仕事を月曜日から木曜日までに済ませ、お施主様や他業種の方々に迷惑をかけないよう心掛けた2年間でした。正直かなり大変でした。

◆仕事や家庭との両立はどのように。

家族の支えがあり、無事卒業することになりましたが、家庭サービスがなかなかできず、申し訳ない気持ちです。帰りが遅くなるときも、妻の一言で好きなようにやらせていただきました。ただ、一生懸命何かに取り組んでいる私を見て、子どもたちも部活動や勉強に取り組む姿勢が変わったように思えます。意外な相乗効果でしたね。

◆運営委員長として心掛けていたことは何ですか。23期はどのようなクラスでしたか？

年配者の私が口を出し過ぎると、良いことは無いと思い、できるだけ、本人たちの意思に任せることにしました。要所では各々が意識して行動していたので、あまり出番は無かったかと思います。年齢層もバラバラだったので、それも良かったかも。

第20回公開講座でクラス代表スピーチ（2018年10月21日）

◆印象に残っている出来事、授業は何ですか。

やっぱり実習棟実習ですね。各班に分かれて一棟を組み上げることはとても大変でした。各班の取り合い部分は皆、話し合いながらやっていて、今でもその時の光景が目に浮かびます。台風によるカレッジ祭の中止、新型コロナ感染予防対策で縮小開催した卒業制作発表会、卒業（修了）式の中止とその代わりの修了証書授与式も忘れられない思い出です。

◆卒業制作「屋台」にこめた思いとは？

伝統工法と現代の技術を合わせたものを作りたかった。誰もやったことがないレジン（樹脂）で天板をつくるところが一番緊張しましたね。ある意味、一発勝負でしたの

第25期生は 16人

2020年4月入学の第25期生は16人です。若手人材の確保を巡る業種間、企業間競争の激化を反映し、募集活動は苦戦しました。しかし、新入生は意欲の高い方ばかりです。少人数であることを生かし、質の高い教育に 一層力を入れていきます。

入学式は4月8日（水）、翌日9日から江東実習場で「集中授業」が始まります。第26期生募集の活動は例年より早く行う予定。授業見学を歓迎します。

最新情報はウェブサイトでご確認ください。

入学を迷っている人へ
まず一歩踏み出す勇気を

で、屋台班は各々やることを決めていて、担当分野が終わったら仲間を助けるというスタイルでしたね。普段の現場をイメージしていたので、滞りなくできて本当に良かった。反省点としては、もう少しああしとけば良かったと思う箇所があったことです。

◆カレッジの良いところ、素晴らしいと思うところは？

一言でいうと、仲間ができたことです。毎週末、2年間、一緒に過ごせたことは何物にも代えがたい時間でした。今後も付き合うことができる素晴らしいメンバーでした。

◆カレッジの悪いところ、これから変えたほうがよいと思うことは？

同級生たち、研修生たちに言うとしたら、「短期大学校」であるという認識がもっと必要ですね。義務教育ではないので、目標・目的を持って入学していただきたいですね。半分は学生、半分は社会人という形ですが、大人として行動してもらいたいですね。

学校に対しては、指導と教育方針の徹底をお願いします。先生と学生（研修生）の関係がより良くなりために、クラス運営委員と事務局との定期的な話し合いが必要だと思います。

◆修了（卒業）後の当面の目標は何ですか？

卒業後は建築士の資格を取りたいです。この二年間、座学で学んだことを形にしようとしたら、必然的にこの考えに至りました。

◆入学を迷っている人へのメッセージをお願いします。

一歩を踏み出すことが大事です。勇気が要りますね。行動をしないで後悔するより、行動をした後に、後悔したほうがいいですよ。何か形が残りますから。

最後に、私の好きな言葉を紹介させてください。

「必死に生きてこそ、その生涯は光を放つ」　織田信長

奈良研修では日本建築の真髄を学んだ。写真は、瀧川昭雄　「瀧川寺社建築」会長の講義を受ける第23期生（2019年11月21日）

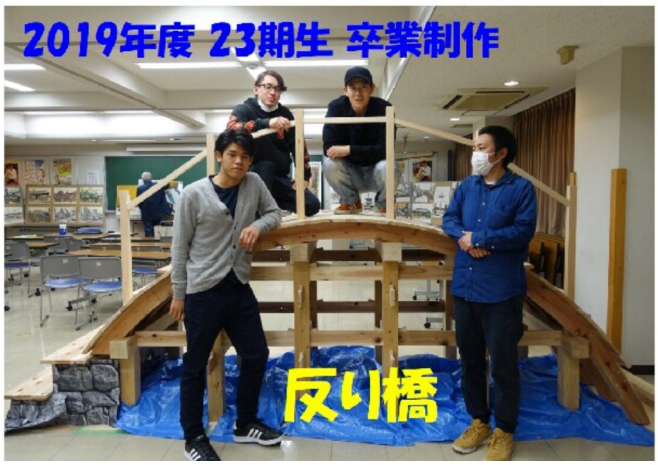
※お知らせ：2020年度の技能五輪全国大会（建築大工）に、23期生から、関根　祥智さんと横山　雄人さんが出場することが決定しました。

3月13日

新型コロナウイルス感染予防のため修了式は中止しましたが、修了式会場を使い、修了証書と各賞の授与式を教務運営委員の先生方と事務局・教務の参加で行いました。現場作業に従事しながらの学校生活はとてもハードであり、その分、他では得られない特別な絆が築かれたようでした。第23期生22人の修了で本校の修了生の累計は519人となりました。　2020年3月28日、池袋校舎

第23期生 卒業制作 紙面公開！

新型コロナウイルス感染予防のため、3月8日(日)の発表会は非公開でした。



遊　具

2019年度 23期生 卒業制作

2019年度 23期生 卒業制作

2019年度 23期生 卒業制作

東京建築カレッジの教育実践の特徴の１つが「卒業制作」です。大学の建築学科の卒業設計は、ある意味、設計事務所の実習的であり設計者の自己完結型。施工側の作業、気持ちは体験できないことが多いと思われますが、本校では、設計と施工の両方を、施工者の側に軸足を置いて体験する場に卒制を位置付けています。

第23期生が卒業制作について口を揃えたのは、図面の大切さ。プランナー、設計と施工をつなぐ共通言語が図面であり、様々な職種の人が協働してものを創り上げる作業で核となるコミュニケーションツールだからです。

人を動かすには何が必要か、卒制を通じて、棟梁（とうりょう）に必須なことを学んだ人もいたようです。

第23期生 特別賞一覧

3月28日、在籍の22人全員に修了証書を授与した後、技能照査合格者19人に合格証書が渡されました。その後、以下の特別賞の発表が行われました。

◎東京都職業能力開発協会会長賞〔グランプリ〕
メンデス・アルシラ ・ホセ ・マヌエルさん
技能照査実技試験１位、出席率94%
職業訓練生全国交流集会ミニ弁論大会最優秀賞

◎東京土建委員長賞
佐藤 義和さん
技能照査実技試験4位、学科5位、総合3位
クラス運営への多大な貢献

◎皆勤賞　該当者なし

◎精勤賞　出席率95%以上
関根 祥智さん、上小園 光虹さん、横山 雄人さん、
秋元 義裕さん、春田 昌哉さん、飯島 遥斗さん、
久保井 優樹さん、西田 安大さん

◎技能賞　該当者なし

◎技能奨励賞
関根 祥智さん、西田 安大さん、ホセ マヌエルさん

◎功労賞
佐藤 義和さん、北川 健さん、日向 邦弘さん

◎努力賞
上小園 光虹さん、久保井 優樹さん、髙橋 晃さん、
春田 昌哉さん、三宅 啓太さん

◎卒業制作賞
最優秀賞　「反り橋」班
髙橋 晃さん、飯島 遥斗さん、志村 飛鳥さん、
関根 祥智さん

優秀賞　「船頭小屋班」
池宮 敏和さん、上小園 光虹さん、久保井 優樹さん

優秀賞　「屋台班」
佐藤 義和さん、秋元 義裕さん、佐々木 篤さん、
三宅 啓太さん、横山 雄人さん

努力賞　「ゾム・ドーム班」
メンデス・アルシラ・ホセ・マヌエルさん

3月27日(金)24期生 進級試験（学科・実技）

1年生の授業から

1年次の授業全体の理解度は学科・実技の双方で実施する進級試験で問います。限られた時間で課題を完成できるか、及第点に達するか、先生方から厳しくチェックされるので、24期生は緊張して臨みました。追試の若干名を含めて、全員の進級が決定しました。4月からは卒業制作も始まります。

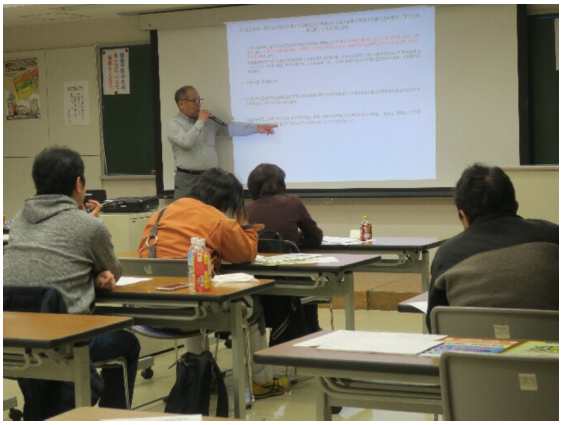
進級試験（実技）の様子。図面の読み方、サシガネの使い方、墨付け、刻み。学んだことの理解度が問われます。3月27日

豊島区の空き家の現状を学ぶ

2019年度 第5回 ミニ公開講座

3月13日（金）に開かれた、2019年度　第5回ミニ公開講座「増え続ける空き家をどうする！豊島区における現状、調査報告～対策の難しさを率直に語る」（広瀬達雄講師＝一級建築士）は13人が参加しました。

古民家リノベーションは、オーナーと設計・施工者、利用者の三者が共にハッピーになる成功事例が脚光を浴びがちですが、空き家の総数はとてつもなく多く、利活用が困難な建物・部屋が多いこと、改修工事におけるアスベスト被曝の危険性、きちんと対応できないと改正民法によって設計者・施工者へに悪影響が生じることなど、対処がとても難しい問題であることを豊島区の事例を通して学びました。広瀬先生は「厳しさを直視した上で、課題解決に専門家として向かっていこう」とまとめました。



毎回、一般の参加者が大半を占めるミニ公開講座（左写真）。東京建築カレッジの存在意義を自覚し、社会的役割を実感する場になっている。